ドイツ艦艇、異例の日本寄港

中国を意識、太平洋関与強める

岸信夫防衛相は5日、日本に寄港したドイツ海軍のフリゲート艦「バイエルン」を視察した。海外領土を持たないドイツがインド太平洋地域に艦艇を派遣するのは異例で、日本寄港は19年ぶり。欧州各国は中国の台頭を意識し、この地域への関与を強める。日本はこうした動きを「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」構想の実現に寄与すると歓迎している。

「今回の寄港は、インド太平洋地域の平和と安定に積極的に貢献するというドイツの強い決意を国際社会に広く示すものだ」

岸氏は東京国際クルーズターミナル（江東区）に着岸したバイエルンを視察後、会見で強調した。ゲッツェ駐日大使も、ドイツ方面に戻る際に南シナ海を航行すると明かし、「国際法を守り航行の自由に向かって連携していることをアピールする」と語った。

5月にフランス、9月には英国とオランダと、欧州各国の艦船が続々と日本に寄港している。防衛省幹部は「欧州各国の中国への警戒感がこの2、3年で大きく変わった」と話す。

ドイツ政府は昨年、「インド太平洋ガイドライン」を発表。外交や安全保障、環境など幅広い政策の基本的な考えをまとめた。ドイツ連邦軍のツォルン総監は5日の山崎幸二統合幕僚長との会談で「北大西洋条約機構（NATO）、欧州連合（EU）の枠組みで地域の脅威などを分析し、視野を広げていかなければならないとの結論に至った」と今回の寄港の理由を説明した。（松山尚幹、成沢解語）

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.